せんとする者の必ず參照すべき書となることを失はないであらう。（菊版一三六七頁、索引一三四頁、東京岩波書店發行、定價拾參圓）〔柴田實〕

シーボルト研究

日獨文化協會編

文政六年、クライエル、ケンフェル、トウンベリー等の後をうけて、長崎出島の和蘭商館の和蘭醫官として來朝したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが、單なる醫學者たるのみならず、博く歴史・地理・言語・人種・動植物等諸般の學問に通じ、その在留期間中に於て、恰も、黎明期にあつた所の我國洋學の熱心なる學徒達と深き交渉を持ち、彼等を教育し、その研究を助長し、日本に於ける洋學の發展史上に大なる足跡を殘すと共に、又彼自ら、日本の歴史・地理・動物・植物・言語・人種・風俗・制度・文物その他多方面にわたる研究を遂げて、その大著「日本」をはじめ、多くの書を著して之を歐洲に紹介した大なる功績は、永く忘るべからざる事である。明治以來、シーボルトに關する研究は既に多くなされ、又、彼の著作もかなり多く出版されてゐる。然し尚、海外にある文獻資料にして研究未完のものが少なからずあつたのである。かゝる時、昭和九年の春、伯林の日本學會長前駐日大使ウヰルヘルム・ゾルフ氏の好意によつて、同學會所有のシーボルトに關する文獻資料の内三百餘點を東京の日獨文化協會が借受けることが出來た。その文獻は、東京帝國大學圖書館内に設けられた「シーボルト文獻研究室」に保管され、昭和十年四月には、東京上野の科學博物館内で「シーボルト資料展覽會」が開催されて、それらの資料が一般に公開される一方、同研究室に於ては、入澤達吉博士を研究委員長とし、各專門の學者がそれ〴〵の部門に就いて研究が進められたのである。この間約二年、同文獻資料は昭和十一年中に伯林に返送され、「シーボルト文獻研究室」も同年三月閉鎖されたが、今度、その各擔當部分に於ける研究の結果が記述され、一書に取纒められのが本書である。本書所載の研究報告及びその執筆者は、次の如くである。

言語學史上におけるシーボルト先生……新村　出
大全早引節用集……入澤　達吉
鳴瀧塾……黒田　源次
門人がシーボルトに提供したる蘭語論文の研究……緒方富雄・大鳥蘭三郎・大久保利謙・箭内健次
シーボルトの第一回渡來の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の檢討について……板澤　武雄
シーボルト先生のアイヌ語研究……黒田　源次
シーボルト先生とアイヌ語學……金田一京助
シーボルト作成の地圖……蘆田伊人・箭内健次
シーボルトと日本に於ける西洋醫學……大鳥蘭三郎
Plantae Sieboldianae. A Reviewed Enumeration of the Japanese Plants Collected and Described by Dr. PH. FR.

von Siebold……Masuji Honda
シーボルトと動物學……小野　嘉明
シーボルトと本邦の鯨……小川　鼎三
日本學會所藏筆者不明の昆蟲類の和名・
獨名・學名對照表に就いて……古川　晴男

以上十三編である。今、此等の中、三四のものに就いてその要旨を簡單に紹介してみよう。

新村博士の「言語學史上におけるシーボルト先生」に於ては、シーボルトの獨逸に於ける修學時代乃至彼の最初の日本來朝前後の獨逸學會は、比較言語學、また東洋學が新たに勃興し始めた時期にあたり、シュレーゲル兄弟、グリム兄弟、或はレミュザー等の言語學者乃至東洋學者があり、かゝる學會の情勢の中に育つたシーボルトが、その專門こそ醫學ではあつたが、又彼の日本に於ける日本研究に大なる興味を持たしめるに至つたものであるとされ、又同時に、歐洲に於ける東洋研究の勃興の情勢と殆んど期を同じうした當時の日本に於ける洋學勃興の機運が、彼の日本研究と結びつくものがあり、日本研究に於ける彼のあの偉大なる業績を殘さしめたとし、特に言語學に關して、シーボルトの日本語と朝鮮語・蝦夷語（アイヌ）・滿洲語・支那語との比較を試み異同を考へたことをのべられ、殊にアイヌ語學については、歐洲に於けるアイヌ語學の鼻祖として彼の言語學史上の功績中最も大なるものであると述べられてゐる。

入澤博士の「大全草引節用集」(Vocabularium Linguae Japonicae litteris Katakana & Hirakana enscripsum annexis characteribus in Japonia usitatus.) は、この書は三卷よりなり、第一卷は東京の市河三喜博士、第二卷はロンドンの大英博物館、第三卷に伯林の日本學會の所藏となつて各地に散在してゐるが、昭和十年の「シーボルト資料展覽會」の際、第一卷と第三卷が一堂に會し、又その後、第二卷も大英博物館へ依頼した寫眞によつて補はれたので、これを記念するためと言ふので、各卷の扉と內容の一頁を寫眞版にして載せられたものである。

黑田博士の「鳴瀧塾」は、先づ、シーボルトの日本來朝當時に於ける意氣込、その理想と抱負、そしてその計畫實行の端的快速なりしことを述べられ、次にシーボルトが長崎郊外に開いたところの鳴瀧塾舍に關して考證され、更に、彼の門下に集つた門人、そしてその門人達の教育法についてのべられ、最後に、シーボルトが大なる業績を擧げ得た理由として、第一に彼の好學的精神と指導的精神、第二に和蘭當年の國狀より和蘭政府がシーボルトの學術的研究を支持し之を利用する用意のあつたこと、第三に我國に於ける蘭學の進歩の狀態が彼の活動を受入るゝだけの都合よき條件を具へてゐたこと、第四に彼の門下に當時の日本に於ける俊秀な材能が集つたことの四つを擧げて居られる。

「門人がシーボルトに提供したる蘭語論文の研究」は、伯林の日本學會所藏のシーボルト文獻中にあるシーボルトの門人執筆の蘭語論文中、代表的なるもの十七編を取り上げて、緒方富雄、大鳥蘭三郎、大久保利謙、箭內健次の四氏が、夫々分擔して、その

內容を吟味し或はその典據を求め、更にシーボルトの原稿、著述との關係を採り、文獻學的に調査した結果の報告である。一體、此のシーボルトの門人執筆の蘭語論文なるものは、シーボルトがその門人に課題を設けて蘭語で論文を草せしめたもので、一面に於て門人の教育法の意味をもち、その論文により門人にドクトルの證明書を與へたりなどしたが、同時に他面に於ては、シーボルトの重要なる目的は、これら門人の論文を彼の日本研究の有力な材料とするにあつたのであつて、彼の著作「日本」などに於ても、その隨所に門人の論文が資料として用ゐられてゐるのである。本編に於ては、その總論に於て、シーボルトが如何なる目的の下に門人に論文を執筆せしめたか、又、門人は如何にして、如何なる事情の下に之を書きて提出せるかについて詳しく論ぜられてゐる。本編に於て研究報告されてゐる十七編の蘭語論文は、

一、日本產科問答(美馬順三稿)、二、生理問答(高良齋稿)、三、日本疾病志(高良齋稿)(シーボルト加筆草稿本)(淸書本)四、灸法略說(美馬順三・戸塚亮齋・石井宗謙譯)、五、花彙(桂川甫賢譯)、六、日本產昆虫圖說・日本產蜘蛛圖說(石井宗謙譯)、七、日本に於ける茶樹栽培と茶の製法(高野長英稿)、八、製鹽法(戸塚靜海譯)、九、飲膳摘要(高野長英譯)、十、勾玉記(伊藤圭介稿)、十一、日本古代史(美馬順三譯)、十二、大和事始(岡研介譯)、十三、都名所車(高野長英譯)、十四、南島志(高野長英譯)、十五、日本貨幣考(鈴木周一稿)

である。尙、本編の最後には、「日本學會所藏シーボルト門人蘭語論文目錄」が附載されてゐる。

板澤氏の「シーボルトの第一回渡來の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の檢討について」は、先づ最初に、シーボルトの第一回渡來の使命として、十九世紀初期に於ける和蘭の複雜なる政情を述べ、和蘭の新植民地政策の一つとして、日蘭貿易の再檢討を行ふことゝなり、そのため日本の國民、制度、政治、國土、產物等の綜合的研究が必要とせられたのであつて、シーボルトの學識能力がこの使命を果すに適任と認められて彼の第一回渡來となつたと述べられ、第二にシーボルトの日本研究として、シーボルトに關する文獻の中、バタビヤ文書館にあるものを記し、殊に、バタビヤ文書館文書 Japan 22, Bijlage No. 6 のシーボルトが一八二三年より一八二五年に至る日本滯在中の研究業績の報告が載せられ、簡單な譯註が施されてゐる。又、シーボルト滯在中ヨーロッパ及びバタビヤより舶載された書籍名がバタビヤ文書館の文書中より記されてゐる。第三のシーボルトの日蘭貿易の檢討では、伯林の日本學會所藏のシーボルト文獻中の「日本貿易」(Japanische Handel)なる三册の資料について論究されてゐる。そしてこの書に採錄されてゐる十九世紀初期の日蘭貿易史料は、十九世紀の日蘭貿易に關して良書の未だ公にされてゐない今日、正に史料の一部の缺を塡補するものとして重視さるべきもので、特に、之に載せられてゐる表等は、我が經濟史の研究に幾多の示唆を與へるものであると述べ、最後にその表の中二三を例示されてゐる。

「シーボルト作成の地圖」は、シーボルトの作成した所の日本に

關する地圖の中、その主なるもの卽ち「日本帝國圖」、「蝦夷及び日本領千島の圖」、「樺太島及びマンコー河口圖」の三種の地圖に關する研究で、前後編に分ち、前編に於ては、蘆田伊人氏が、「日本帝國圖」及び「蝦夷島及日本領千島の圖」について、シーボルトがこの地圖を作成するに當つて用ゐたところの原據について批判し、最後に、最上德內の樺太調査、間宮林藏の間宮海峽探險の事に就いて記し、文化五年十一月の間宮林藏の報告書カラフト島地名大概附會之書付(內閣文庫)の全文を本編の終に附收してある。後編サガリンに於ては、箭內健次氏が「樺太島及びマンコー河口圖」に關して「最上德內の原圖による」と記されてゐる此の地圖が、その作成さるゝ際、如何なる歐洲側の資料が參考せられたかについて、クルーゼンステルンの太平洋圖等によつて考證し、本圖の歐洲學會に與へた衝動の大なりしことを論ぜられてゐる。

その他、金田一博士、本田博士、大鳥、小野、小川、古川の諸氏も夫々その專門的な部門について、シーボルトに關する研究を遂げられて居り、夫々の專門家にとつて多くの示唆を與へるものがあらう。

尙、本書には、卷頭に「シーボルト略年譜」が載せられ、又、卷末には、大久保利謙氏編の「日本に於けるシーボルト書目」が附載されて、シーボルトの著書、その邦譯本、及び、シーボルトに關する著書、雜誌新聞揭載の論文が列擧されてあるのも、研究者にとつて非常に便利であらう。(菊版七三二頁、定價六圓、岩波書店發行)〔水野恭一郎〕

近江に於ける宮座の研究

肥後和男著

日本社會の歷史的研究に於いて、神社が一の重要なる着眼點となるべきは言ふを俟たない。ところがそれは曾てこれと國家との關係に於いて、——如何なる祭神を奉祀するかとか、延いては中央的神格と如何なる關係にあるかとかを——見んとする態度であり方法であつた。これに對して現代に於ける神社への關心は、單にそれだけを以つて足れりとされる事は出來ぬと考へ、神社が一方にその直接の周圍に自己の氏子を有し、日常かゝる直接の奉仕者に於いて祀られてゐる事實に注意して、この方面からも亦神社を中心とする日本社會の研究の必要を認め、特に神社と村落——氏子の生活集團としての——との關係に於いてこれを見んとする。これが宮座の研究として進められたのは、多年京都帝國大學にあつて國史研究に精進された著者にとつては極めて自然な道程であると言はねばならない。

近畿諸府縣の村落には、宮座と稱せられ、或ひはこれに類似する神社祭祀の結合體がある。著者はこれを神社と氏子との關係に於いて、一の典型的な組織と見做し、これを明かにすることは諸他の氏子組織の理解を助ける有力な手懸りともなり、且つは又その社會的な性質を究めることによつて、廣く日本社會に含まれる諸他の集團型式の研究にも尠からぬ寄與をなし得べしと觀ぜられた。而してその研究に於いては、宮座が今日主として民俗的現